

一到達点としての「私と汝」

一人格をめぐる西田の思索

聖学院大学 片柳榮一

西田は「私と汝」の始めのところで、「私と汝の関係について種々なる難問は内界と外界とが対立し、各自が絶対的に自己自身に固有なる内界を有つと考へるから起るのであると云ふことができる」(VI,347)と述べ、この論文の目指すところを示唆している。この論文の目指すところは、私と汝という、「人格」的關係の成り立つ場の解明であるが、人格というもののもつ基本的性格としての自己自身に固有の内面、内界を認めたいうえで、いわば独我論的な閉鎖性を如何に打破するか、という問いに導かれていると言える。

外界と内界の隔ての撤去という観点から興味深いのは、個物と環境の相互限定から考察を始めた西田が、この両者の相互限定のうちに「我々の意識と考へるものが如何にして生じ、如何なる意味を有するものなるかを明にすることができると思ふ」(VI,351)と述べていることである。このような試みは、西田にとっても新しいと言える。「個物が環境を越えると考へられる時、場所的限定が之につれて消え失せるのではない、場所的限定は何処までも之に対して逆限定の意味を有たなければならぬ。而もそれはもはや之を限定するといふ意味を有つことはできない。単に之を映すといふの外ないのである」(VI,352)。西田によれば意識とは、個物が環境を越え、場所に対して自由となった時、尚環境、場所が個物に対して持つ逆限定であり、自由になった個物がもつ環境に対する関わりであり、各自の意識面とはこの環境への関わりを表す。「環境的限定の極限に於て、個物が自己自身を限定することによって、逆に環境を限定すると考へる時、個物は各自の自己限定面を有し、かゝる個物を限定する弁証法的限定面と考へられるものは自己自身を限定する無数の限定面を限定すると云ふ事ができる。私と汝とはかゝる限定面的限定としてそれに於てあるのである」(VI,371)。各自の内界としてある無数の意識面、それを一つにしている、弁証法的限定面が、「私と汝」が於てある世界である。ここに於て「私と汝とは絶対の他なると共に内的に相移り行くと云ふことができる」(VI,391)という。

西田は「汝」を人間にのみ限っていない。昨日の私は今日の私に対して「汝」であり、我々を限定する過去も「過ぎ去った汝」である。汝の定義が明確でないために理解を難しくしているが、定義に類したものを探すなら、「(人格的自己を成立させる他)は絶対に他なると共に私をして私たらしめる意味を有ったものでなければならぬ、即ちそれは汝といふものでなければならぬ」(VI,414-15)が挙げられよう。つまり汝とは、絶対の他として独立していながら、私を私たらしめ、私を生むものである。「私の生まれる時、汝がなければならない」(VI,401)。私は絶対に自由独立でありながら、その存在の全体を汝に負う。この矛盾した事態がさらに解明されねばならない(引用岩波旧版)。